

やきいも

大阪 二年 よしのり

「石やきいもお。」

と ゆう声が聞こえた。

二百円 もってたから 買いに行った。

「やきいも、ちようだい。」

と ゆうたら、車がとまって、

「何こ。」

と おっちゃんが聞いた。

「一こ、二百円。」

と ゆった。

ぼくは、大きい声で、

「うそう。」

と ゆった。

おっちゃんは、ふたをあけながら、

「ほんと。」

と ゆった。ぼくは、また、

「うそやろ。」

と ゆったら、へいきな顔で、

「ほんま。」

と ゆった。

しかたがなかったから、二百円 やった。

おっちゃんは、ぐん手をはめて、茶色のふくろに、

やきいもをとった。ぼくは、

「一こ、おまけして。」

と ゆった。おっちゃんは、
「いや。」
ってゆった。

ぼくは、もう一回、
「おまけ やってや。」

と ゆった。おっちゃんは、
「しようがない。」

と いった、そのふくろに、もう一こくれた。
家に帰ったら、おかあさんが、

「まさえ、みたって。」

と いったから、やきいもを つくえの上において、
なわとびしながら、見たった。

だいいぶたって、家へ入ったら、
おにいちゃんに やきいも 二本とも 食われてた。



(指導 天野里子)